

2022年10月16日 主日礼拝

説教題「天は、聞きたもう」出エジプト記 16 章 1～12 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる』と。」(出エジプト記16章12節)

出エジプト記 14 章で、海の水が左右に分かれてエジプト軍から救い出されるという神の大いなる奇跡を体験したイスラエルの人々は、続く 15 章で「海の歌」という賛美を歌っています。心の底から喜びにあふれて神を賛美せずにはいられなかったのでしょうか。きっと彼らはエジプト軍が迫った時モーセに「どうして俺たちを荒れ野なんかに連れてきたのだ！」と食ってかかったことを深く反省し、「これからはどんなことがあっても神さまを信頼していこう！」と心に決めたことだろうと思うのです。ところが 15 章を読むと「海の歌」を歌った三日後に彼らは「この荒れ野には、苦しくてまずい水しかない！」と不平を漏らし始めます。

あれだけ大きな奇跡を体験したにもかかわらず、「たった三日で」また不平を漏らす。「イスラエルの民の信仰はなんと情けないのだろうか」と思うのですが、しかし荒れ野の旅において三日も水が飲めないという状況は相当に過酷な状況です。わたしなど、これまでの人生で三日も水が飲めない過酷な状況を味わったこともないのに、彼らの信仰の弱さを非難する資格はない。胸を当ててみるならば、たった数時間前の恵みさえも簡単に忘れて不平を漏らしてしまう自分に、イスラエルの人々を笑う資格はないと思いました。

その過酷な荒れ野の旅において、イスラエルの民は別のつぶやきを漏らし始めます。「荒れ野にはまともな食べものがない！エジプトでは肉のたくさん入った鍋の前に座り、腹いっぱいパンが食べられたのに！」(3 節)。エジプトの奴隷の食事が「御馳走」として思い出されるほど、荒れ野の旅は過酷なものだったでしょう。

そのイスラエルの人々に主なる神は語ります。「わたしはイスラエルの人々の不平を聞いた」(12 節)。そして夕暮れにはうずらを、朝にはマナという不思議な食べ物をもって彼らを養われたのでした。マナは 31 節によると「コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした」と書かれています。この箇所を読むたびにわたしは「マナっていったいどんな味がするんだろう。一度食べてみたいものだ」と思います。イスラエルの人々は初めて見るマナを手にして「これはいったい何だろう？」(15 節)と言いながら口にしたのでした。

今回、わたしはこの箇所を読みながら「主は聞いた／聞かれた」という言葉が四回も使われていることに心がとまりました。「天の主なる神は、聞きたもう」。天の主なる神は、イスラエルの人々のつぶやきを「情けない信仰だ」と笑うことなく、

無視することもなく、ちゃんと「聞いてくださって」いる。そのことが示されました。私たちはよく「祈りが聞かれた」と言いますが、そのときの「聞かれた」は、「祈ってお願いしたとおりの結果になった」という意味が多いように思います。ですから「願いが叶えられない」と「祈りは聞かれてない」と言うわけです。しかし大切なことは「わたしの願い通りになるか、ならないか」の前に、神さまがわたしの祈りにもならない、心のつぶやきに「耳を傾けて」くださっている。荒野の旅の辛さの中で、どうしても口から出てしまう弱音をちゃんと「受け止めて」くださっているという事実です。たとえ目の前の現実がすぐに私たちの願い通りにならないとしても、神は「聞いてくださっている」し、わたしの願った通りの結果ではないとしても、神さまが一番良いと思われる道にわたしを導いてくださる形で「わたしの祈りを聞いてくださる」のです。

この「恵みのしるし」が「マナ」という不思議な食べ物でした。ヨハネ福音書はイエス・キリストこそ「天からのマナ」「命のパン」であると証言しています。天の神さまは、私たちのつぶやきも弱さもちゃんと「受け止めてくださっている」。その「恵みの究極のしるし」が、キリストの十字架なのです。

大谷レニー先生が語られた中で「わたしの祈りの場所はトイレだった」という言葉が深く心に刻まれています。誰にも邪魔されることなく、静かに、神さまに向かって祈れる場所。それがトイレだった。そのトイレの祈りという神さまとの確かなつながりが、レニー先生の信仰を支え続けた。では、わたし自身はどこで、どのようにして神さまとつながっているだろうか。このレニー先生を思う時に、マタイ福音書6章6節と8節の御言葉が示されます。「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」。神さまは私たちが祈る前から必要なものをご存知だというなら、祈らなくてもいいではないかと思いますが、そうではない。わたしの弱さも未熟さも、ダメなところもすべてご存知で、わたしに必要なものをご存知の神さまと、私たちが一緒に歩むために祈りは大切な「つながり」なのです。それゆえに、祈りは私たちの願いを叶えるためのツールではなく、私たちが神さまの心とつながり、神さまのもとにある安らぎと喜びと勇気をいただいて、私たちが神さまに従っていくために大切なツールです。そして、祈りで神さまにつながる時、私たちは自分では気づかない、別の方法で神さまが私たちが養い、支えてくださっている、その神さまの大きな恵みに目を開かれていきます。祈りは、私たちの願いごとを神さまに聴いてもらうツールではなく、天の神さまの豊かな恵みにつながり、神さまの恵みを一つ一つ数えて、賛美をささげながら歩むために大切な「つながり」なのです。「天は、聞きたもう」。この神さまとの静かで確かな「つながり」を大切に歩いていきたいのです。